

秀吉の中国人説について

鄭 潔西

一、はじめに

万曆二十一年（1593）年初、朝鮮役で敗戦を繰り返した日本は、敗勢を挽回するために、豊臣秀吉¹の自らの出征と援軍の追加徴発を図っていた。これに関して、清末に黄遵憲が著わした『日本国志』巻五「鄰交志上二・華夏」に次のように述べている。

秀吉聞明軍捷、議親渡海、諸將連署止之。是年（万曆二十一年）癸巳三月、議使七將攻晉州、晉州城險兵精、七將皆大敗退兵、又多疫、於是三監欲退守釜山、或曰、糧盡寧食沙、都城不可棄也、乃議乞援兵。秀吉先令二萬赴援、既無兵可徵、秀吉乃嘆曰、吾不幸生於小國、兵力不足、使我不克遂耀武八表之志、奈何奈何。悵然久之。²

秀吉は追加の侵略軍を遣わし敗勢を挽回したかったが、小国である日本は、二万の兵を追加し遣わした後、徴発できる兵士の供給人員がなくなる状況に陥った。秀吉も「吾不幸生於小國」とため息をついたしかないとある。

しかし、秀吉が嘆息した人生の不幸ともいえる小国の日本の出身であるという遺憾は、当時中国と朝鮮の史料の記載で補うことができる。万曆朝鮮役前後の明朝と朝鮮の両国では、秀吉に関する情報は多くて複雑である。その一つは、秀吉の中国人説である。事実ではないが、秀吉はもともと中国人である伝説は当時頗る流布していた。

本稿では万曆二十年代の明朝と朝鮮の史書から見た秀吉の中国人説及びその噂の来歴を検討したい。

¹ 豊臣秀吉の呼称について、中国文献の記載に「平秀吉」、「関白」、「関曾」などの場合が多い。本稿では以下「秀吉」と統一する。

² 黄遵憲『日本国志』（王宝平主編『晚清東遊日記彙編』、上海古籍出版社、2001）巻五「鄰交志二〔華夏〕」、頁 68 下。

二、中国史書から見た秀吉の中国人説

万曆朝鮮役の後、明朝では日本関係の著書は急に増えていた。当時、軍事情報の提供、日本時事の理解及び海防整備の参考などのために、多数の日本関係の研究書が上梓された。³それに、明朝は勝利を制すために、日本への情報収集に特に情熱を傾けていた。⁴

それらの数多くの日本に関係する著書のなかに、朝鮮侵略の首悪とされた関白平秀吉の姿は特別に描かれた。それらの著書によると、中国人としての秀吉像も複数的に存在していたことが分かる。

(一) 日本に亡命した中国の海賊

談遷の『国権』万曆十九年（1591）五月壬辰（二十八日）条に、当時の日本時事について次のように記されている。

平秀吉篡日本國。秀吉、本全州人奴、或云慈谿陸氏、嘉靖末、從粵盜曾一本而敗、亡命日本、國王任之、善用兵、自稱關白、猶漢大將軍也、遂篡立。⁵

『国権』によると、秀吉は万曆十九年（1591）五月に日本国の政權を奪い取った。秀吉は、本来全州（広西省全州か、福建省泉州か）の人奴であり、あるいは浙江寧波の慈谿県の陸氏であり、嘉靖の末年、広東の海賊曾一本に従って戦いに負けて日本に亡命したのである。日本の国王は彼を信用した。彼は兵を用いることにたけており、関白と自称した。関白は漢の大將軍のようであり、彼はついに日本の政權を奪い取って国王と自立した。

『国権』は明が滅びた後、談遷が著わした明王朝に関する編年体の実録形式の史書である。

³ 例えば、李言恭・郝杰『日本考』、『日本風土記』（万曆二十一年[1593]刻本）、謝杰『虔臺倭纂』（万曆二十三年[1595]刻本）、郭光復『倭情考略』（万曆二十五年[1597]刻本）、範涑『兩浙海防類考統編』（万曆三十年[1602]刻本）、諸葛元声『兩朝平攘録』（万曆三十四年[1606]刻本）、蔡逢時『温処海防図略』（万曆刻本）、鄧鐘『籌海重編』（万曆刻本）、宋応昌『経略復国要編』（万曆刻本）、茅瑞徵『万曆三大征考』（天啓元年[1621]刻本）、黄 俔『倭患考原』及び附録『恤援朝鮮倭患考』（清抄本）、侯繼高『全浙兵制』附録「近報倭警」（清抄本）などの著書がある。

⁴ 万曆朝鮮役前後の明朝への日本情報について、松浦章「明代海商と秀吉「入寇大明」の情報」（末永先生米寿記念会編纂『末永先生米寿記念献呈論文集』坤、奈良明新社、1985）頁1717～1743、三木聡「福建巡撫許宇遠の謀略－豊臣秀吉の「証明」をめぐる－」（高知大学人文学部『人文科学研究』4、1996）、米谷均「『全浙兵制』「近報倭警」にみる日本情報」（『8－17世紀の東アジア地域における人・物・情報の交流－海域と港市の形成、民族・地域間の相互認識を中心に－』（東京大学大学院人文社会系研究科、2004）頁125～142等の論考があり、参照されたい。

⁵ 談遷著、張宗祥校点『国権』（古籍出版社出版、1958年）卷七五、万曆十九年（1591）五月壬辰（二十八日）条、頁4651。

同じような記事は『明神宗実録』に見えないが、他の根拠があると思われる。当時の日本情報、『国権』の記載と時間的に一番近い記事は『万曆邸鈔』万曆十九年（1591）六月条の記事である。

遙聞閩人陳中（申）從琉球來、報稱倭奴造船挑兵、傾国入寇、見在福建查審。伏乞嚴加備禦。⁶

『万曆邸鈔』の該当の条によると、万曆十九年（1591）六月、琉球から帰国した閩人陳申が提供した秀吉の「唐入り」情報⁷に触れた浙江巡撫常居敬の上奏文が既に北京に届き、官報の『万曆邸鈔』の形式をもって明朝の朝野には伝わっていた。『万曆邸鈔』当月の記事は、当時に提出された浙江巡撫常居敬の上奏文及び閩人陳申の報告に拠ったものである。

しかし、『万曆邸鈔』の日本情報の源泉である陳申の報告は秀吉に関して提供した情報は少ない。陳申の報告に、

日本國原有六十六州之主、今倭王関白、奮身奴隸、弑其王而奪之位、仍藉故主餘威、兼併日本六十六州之地為一、陰謀席捲琉球・朝鮮、併吞中國。⁸

とあり、上記の『国権』の記事の「平秀吉篡日本國」の部分としかと重なり合わない。談遷は上記の秀吉の中国人説を打ち出した記事は、恐らく他の史料も参考にしたものと思われる。

（二）華人秀吉の倭王娘婿説

万曆二十一年（1593）の序文がある張瀚の『松窗夢語』は恐らく秀吉が中国人である情報を披露した一番早く刊行された著作である。張瀚は日本の歴史と現状を考察し、『松窗夢語』巻三に「東倭紀」を作成し当時の明朝が関心を示した日本の事情について紹介した。当時の時事であった万曆朝鮮役について、張瀚は次のように述べている。

嘉・隆以來、諸洲島嶼各相雄長、山城君號令久不行於諸侯。近傳華人關白平秀吉者入其國、尚倭王寡宮主、陰竊其位、號令洲島、併國數十、今已下朝鮮、墮兩京、揺八道、走其國王、逃竄於我遼陽邊境。遣統帥名[石]田・淺野・大谷・孫七郎等據之。平壤以北、皆高壘堅壁、以抗王師。此其狼心尚未艾也已。⁹

⁶ 『万曆邸鈔』（江蘇廣陵古籍刻印社、1991）万曆十九年（1591）六月条「浙江撫臣常居敬奏」、頁555。

⁷ 侯繼高『全浙兵制』第二卷「近報倭警」によると、陳申が万曆十九年（1591）閏三月福建に到着し、直ちに福建巡撫に日本情報を報告した。その陳述書は「万曆十九年四月」と落款され、五月には既に流布していたことが推測できる。

⁸ 侯繼高『全浙兵制』（『四庫全書存目叢書』子部三一、[台北]莊嚴文化事業、1997）第二卷「近報倭警」、頁173。

⁹ 張瀚編撰、盛冬鈴点校『松窗夢語』（元明史料筆記叢刊、中華書局、1985）卷三「東倭紀」、頁60。

すなわち、華人である秀吉は日本国に入り、日本国王の寡婦暮らしをしていた宮主（公主）を娶って日本国王の婿となり、最後に密かに国王の位を不法に占拠した。張瀚が提供した情報に、秀吉は中国人であることだけではなく、彼の日本国王の娘婿の特殊な身分も頗る興味深い。その娘婿説は、二年後に刊行された謝杰『虔臺倭纂』にも踏襲された。¹⁰

しかし、張瀚の噂は出典にはなかった。「下朝鮮、墮兩京、揺八道、走其國王、逃竄於我遼陽邊境」など万曆二十年（1592）の時事から見れば、日本を支配していた関白平秀吉の中国人説及び日本国王娘婿説という情報は万曆二十年（1592）には既に故郷杭州で老後生活を送っていた八十三歳の老翁であった張瀚の耳に入っていたと思われる。

（三）万曆二十二年（1594）崇明島に漂着した琉球船

万曆二十二年（1594）五月、長江口の崇明島で一隻の倭船（倭人三十四名）が明朝武官に捕獲された報告が北京に入った。『明神宗実録』に、

崇明縣報、獲倭船一隻、倭三十四名。兵部言、但令應天撫按研審真偽、不必解。從之。¹¹とあり、兵部は彼らの真偽は未だ判断できなかったため、応天府の巡撫及び巡按にさらに詳しい調査を命じた。

実は、『明神宗実録』のこの記録は、先月に万曆帝に呈上した南京監察御史蕭如松の「議兵船獲倭疏」に対する返答である。¹²蕭如松の上奏文は驚くべき情報を明朝に報告した。当該上奏文の中で、この三十四名の「夷賊」は「各有島分、係戈里・安南・西洋・大趾・小趾・大佛郎機・小佛郎機等國」¹³で構成された人々であり、彼らは万曆十九年（1591）より陸続して関白に投降し、関白の中国の腹心地方を犯す計画の一環として浙江と南直隸地方の險要を偵察に派遣されたものである。

この三十四名の「夷賊」は言語が通じにくかった上で、さらに明朝官吏の審問に答えたくなかったことで、蕭如松の調査状況はなかなか進めなかった。しかし、名前が審問された一人の夷人「衣水」は漢字が書けた。衣水は当時の日本関白は中国人である情報を明朝に漏らした。蕭如松の「議兵船獲倭疏」に次のように記されている。

¹⁰ 謝杰『虔臺倭纂』下卷「今倭紀」：「使（秀吉）捕海上諸小寇、輒效、王悅、妻以女。」

¹¹ 『明神宗実録』（[台北]中央研究院歴史語言研究所、1962）卷二七四、万曆二十二年（1594）六月辛未（二十四日）条、頁5084。

¹² 朱吾弼輯、李雲鵠等輯『皇明留臺奏議』（万曆三十三[1604]年刻本、『統修四庫全書』四六七冊、上海古籍出版社、2002年）卷十五、兵防類、蕭如松「議兵船獲倭疏」（萬曆二十二年[1594]五月上）、頁672下～676上。

¹³ 同上、頁674上。

又令衣水一名、言寫出萬曆二十二年等字。審稱關白原係中國人、故學寫中國字等。¹⁴

すなわち、衣水という夷人は「万曆二十二年」などの漢字が書けた理由は、日本の政を司っていた関白が本来中国人なので、彼は中国の文字を学習したわけである。

しかし、兵部が懸念した通り、真偽を判断しがたいこの三十四名の「倭人」は琉球国の陪臣の識別によって、琉球人であることが明らかにされた。『明神宗実録』に次のように記録されている。

前崇明擒獲夷船、再加譯審、令琉球國陪臣認識、實非倭人。兵部覆請、就令琉球陪臣帶回本國、以彰不殺屬夷之仁。仍賞捕船員役、以示激勸。上曰、今後沿海地方獲有夷人船、還要詳譯真偽、毋得希圖功賞、枉害遠人。¹⁵

以上、万曆二十二年（1594）五月に崇明島で捕獲した「倭船」及び三十四名の「倭人」は本物の日本船と日本人ではなく、彼らは明朝に漂着した琉球人であったが明朝に「倭人」として誤認されたのである。しかし、彼らは秀吉が本来中国人である情報をも明朝に齎した。

（四）謝杰『虔臺倭纂』（万曆二十三年[1595]自刻本）

万曆二十三年（1595）三月、福建人謝杰が『虔臺倭纂』下巻「今倭紀」に関白秀吉の来歴に次のように記している。

關白者、倭官號、猶中國之稱大將軍、即今所封日本王平秀吉也。原姓木下、名十吉次郎、一名木下森吉、蓋夷種。或云中國人者、非是。好事者習見海濱惡少年亡之夷、不近輒指為關白。吳指為吳人、浙指為浙人、閩指為閩人、並無據。以余所聞、秀吉、其初微乎微者、能登高樹、號假精、曾以樵遇國王于途、醉不及避左右、欲兵之、秀吉以口辨得免、收入王部下、試以諸事、輒了。問之能兵、曰能、捕海上諸小寇、又輒效。王悅、妻以女、俾典兵事。秀吉桀黠、既握兵柄、漸以威懾其下、下人畏之、知有秀吉、不知有王。¹⁶

謝杰はその著書の中で中国人としての秀吉の人物像を否定し、江蘇出身者は彼を江蘇人と指し示し、浙江出身者は彼を浙江人と指し示し、福建出身者は彼を福建人としたが、根拠はなかったと指摘し、秀吉の中国人説の誤伝を明らかにしようとした。

以上の考察から、秀吉の中国人説は、万曆十九年（1591）に秀吉の「唐入り」情報と共に明朝に入った可能性は非常に高い。その後の万曆二十年（1592）に、その噂が秀吉の朝鮮侵略後に強められたと思われる。三年後、明日講和など接触が増えたことによって秀吉の中国人説の

¹⁴ 同上、頁 673 下。

¹⁵ 『明神宗実録』巻二八〇、万曆二十二年（1594）十二月丙辰（十三日）条、頁 5175。

¹⁶ 謝杰『虔臺倭纂』（万曆二十三年[1595]自刻本、『北京図書館古籍珍本叢刊』一〇、書目文献出版社、1990）頁 372 下。

誤伝が消滅した。

三、朝鮮における秀吉の中国人説

秀吉の中国人説は明朝に止まらず、万曆朝鮮役が発生した後、その噂は迅速的に朝鮮に流布した。

(一) 柳成龍『懲毖録』

万曆朝鮮役後、数多くの関係著書は朝鮮で出され、戦争の経過を記録し、自国の興亡を反省している。その一つの有名な著書は当時の「朝鮮宰臣」であった柳成龍が著わした『懲毖録』である。

楊守敬の『日本訪書志』によると、著者柳成龍が「身當其間、至戊戌亂後、乃追爲此録」と記し、万曆朝鮮役の目撃者として戦争の直後に『懲毖録』を作成したものである。『懲毖録』は日本でも「実録為多」とよく評価された。¹⁷

『懲毖録』には秀吉に対して着筆したところが多い。秀吉の来歴について、『懲毖録』巻之一に当時朝鮮に流布していた幾つの伝説が保存されている。その第一説は、いわゆる当時明朝から朝鮮に伝わった秀吉の中国人説である。

万曆丙戌（万曆十四年）間、日本國使橘康廣以其國王平秀吉書來。始、日本國王源氏立國于洪武初、與我國修鄰好、殆二百年。……至是、平秀吉代源氏爲王。秀吉者、或云華人、流入倭國、負薪爲生。一日、國王出遇於路中、異其爲人、招補軍伍。勇力善鬪、積功至大官、因得權、竟奪源氏而代之。¹⁸

とある。すなわち、華人である秀吉は倭国に亡命し、一時的に貧しい負薪の生活を忍んだ後、幸運に恵まれ日本国王と出会い、人柄を驚異とし兵士として招聘され、才能を発揮して高官となり、さらに日本の政権を得て日本国王の源氏に取って代わった。

(二) 申旻用『再造藩邦志』

また、当時の朝鮮国王宣祖の孫であった申旻用の『再造藩邦志』巻之一に、秀吉に関して幾つの説も記している。その第一説も秀吉の中国人説である。

（朝鮮）與倭通和者二百餘年、而凡三入寇、輒不利退矣。至秀吉平定諸島已十餘年矣。或

¹⁷ 楊守敬『日本訪書志』（『楊守敬集』第八冊、湖北人民出版社・湖北教育出版社、1997）巻六「『懲毖録』四卷日本元祿八年刻本」、頁165。

¹⁸ 柳成龍『懲毖録』（日本元祿八年版、関西大学図書館蔵）巻之一。

云秀吉中國福建人、少販備為生、漂到日本、編於士伍、累功為關白。¹⁹

とあり、秀吉は中国の福建人であり、若い頃商売を生業として従事したが、あいにく日本に漂着して日本の軍隊に編入された。日本兵としての秀吉は戦上手で功績を積み重ねて關白に昇進した。その説の根拠は資料の欠如で未だ明らかでないが、同書の秀吉に関する第二説は、ほぼ同じ表現が『全浙兵制』第二卷「近報倭警」に見える。論述の便宜を図るために、両記事の内容を並記して比較してみることにする。

『再造藩邦志』卷一

或云本^①日本民丁。^②嘗樵于途左、遇關白。^③左右欲殺之。^④關白釋之、用于前部刀手。出征隣國、有斬獲功。^⑤遂賜姓。^⑥善諂倭得幸。^⑦名曰十吉次郎。累建戰功、爲大將軍、攝行相事。復賜姓羽柴、名執前。^⑧次年弒關白、逐其子而自立爲關白。^⑨併吞諸國、不以干戈、以黃金行詭計得之。

『全浙兵制』第二卷附録「近報倭警」

日本關白、即漢大將軍號也、挾天子凌諸侯、擅據京洛。今之關白、乃民家之僕、^①以採薪之役、^②遇正關白于道。^③左右欲殺之。^④關白釋而用之、^⑤以為前部。多乎出征隣國、^⑥遂斬首獲功。關白悅之。^⑦賜姓木下、^⑧賜名十吉次郎、^⑨每以諂倭事關白、^⑩累出累捷、關白以為大將軍兼相事。更賜姓羽柴、^⑪名執前。次年遂殺其關白、^⑫逐其子而自立、僭號關白、即初之十吉次郎、而今之關白也。^⑬東征西伐、併日本諸國、然未有戰一陣勝一陣、惟皆甜言大話、黃金詭計得之也。

以上、秀吉に関する第二説は、『再造藩邦志』と『全浙兵制』がほぼ同じく記していることが窺える。具体的に言えば、一文字も変更しなかった場合は、③の「左右欲殺之」の一箇所しかない。②のところの「以採薪之役、遇正關白于道」から「嘗樵于途左、遇關白」への変更のように、『再造藩邦志』が『全浙兵制』の一部分の文字を変えても内容は少しも変わらずに書き直した場合は、次の⑤⑧⑨⑩⑪⑫のところである。⑥の「賜姓木下」から「遂賜姓」への書き直しは、『再造藩邦志』が『全浙兵制』に対して重要な情報の大幅な要約といえよう。⑦のところ、『再造藩邦志』の「善諂倭得幸」が『全浙兵制』の「關白悅之」および「每以諂倭事關白」という二つの記述から組み合わせたものであろう。内容上に実質的な相違は、次の二点しかない。一、①の「民家之僕」を「日本民丁」と『再造藩邦志』に書き直され、庶民の「民丁」から奴隸の「僕」と身分の変化が見える。二、④の「關白釋而用之、以為前部」を「關白釋之、用于前部刀手」と書き直され、「刀手」の内容が加えられ、『再造藩邦志』が他の史料も参考したことがここから見られる。

¹⁹ 申吳用『再造藩邦志』（『中韓關係史料選集』六、[台北]珪庭出版社有限公司、1980）卷之一、頁18～19。

総じていえば、『再造藩邦志』に見える該当秀吉の記事は『全浙兵制』の「近報倭警」の秀吉情報の取りまとめと言えよう。秀吉に関する情報は、地理的に日本と近い朝鮮より、寧ろ遠く離れていた明朝のほうが詳しかった。その詳しい秀吉情報は、明朝→朝鮮のルートによって朝鮮に入り、朝鮮において書き直されたというわけである。当時の朝鮮の日本の事情に関する知識の乏しさがここから窺がえるであろう。

『再造藩邦志』に見た秀吉の中国人説はまるで中国ではやっていた噂と同じだが、福建の出身であることや商人として日本への漂着は同時期の明朝の著書にある記録とは少し違っている。恐らく明朝の史書に見過された福建の商人が朝鮮に齎した噂かもしれない。

朝鮮における秀吉の中国人説は、その原形は明朝の史書まで遡られる。お互いの秀吉の中国人説は極似しており、恐らくある程度の伝承関係があると思われる。それに、その噂は中国の海商により①日本→明朝→朝鮮、琉球の漂流民により②琉球→明朝→朝鮮及び中国の好事者により③明朝→朝鮮との三つのルートによって朝鮮に伝播されたと思われる。

四、秀吉の中国人説の来歴について

上述の明朝と朝鮮の史料に表れていた中国人としての秀吉像は、日本の史料には見出すことが困難である。

秀吉の中国人説の来歴は、中国人が作った噂である可能性は最も高い。しかし、謝杰が提出した単なる中国の「好事者」が作った話と一笑することはできない。秀吉の中国人説は、日本から逃げ帰った中国人と深い関わりがあると思われる。

周知のように、万曆朝鮮役戦前の最初の日本情報は万曆十九年（1591）に明朝に入ったわけである。それは『全浙兵制』に記録が残されている。しかし、当時の日本情報には秀吉の中国人説は未だ触れられていなかった。

万曆二十一年（1593）四月、福建巡撫であった許孚遠が兵部尚書石星の命令により、史世用・許豫らをスパイとして日本に遣わし倭情を偵察させた。翌年の三月一日、許豫が最新の日本情報を齎し報告した。関白秀吉に関する情報について許豫は次のように報告した。

一、稱平秀吉始以販魚醉臥樹下、有山城州倭酋名信長、居關白職位、出山畋獵、遇吉衝突、欲殺之、吉能舌辯應答、信長收令養馬、名曰木下人。又、吉善登高樹、呼曰猴精。信長漸賜與田地、改名曰森吉、於是助信長計奪二十餘州。信長恐吉造反、加獎田地。鎮守大塚有倭名呵奇支者、得罪信長、刺殺信長、吉統兵乘勢捲殺參謀、遂占關白職位。今信長第三子

御分、見在吉部下。²⁰

この情報は恐らく一番早く正しく秀吉の事情を表わしたものであるが、秀吉の出身に関して、確認できる情報を齎していなかった。しかし、許豫の報告に、日本総人口の十分の三を占めた数多くの中国人が日本に居留していたことを明らかにした。

一、浙江・福建・廣東三省人民、被虜日本、生長雜居六十六州之中、十有其三、住居年久、熟識倭情、多有歸國立功之志、乞思籌策令其回歸……

実は、三年前に福建海商陳申が提供した情報の中にも、二千人の中国人が秀吉の麾下において仕えていたことが明らかにされた。

（秀吉）擬今年（万曆十九年）三月入寇大明、入北京者、令朝鮮為之向導、入福・廣・浙・直者、令唐人為之向導。聞唐人計二千人。²¹

秀吉に仕えた在日中国人は、二千人の膨大な数に達していると報告したのである。それ以外の秀吉への服従に甘んじない在日中国人あるいは日本に滞在していた中国海商の数は、その倍以上いたことが推測できる。彼らは、許儀後のように秀吉の情報を明朝に提供したばかりではなく、戦争が発生した前後、中国に逃げ帰った者が多かったと思われる。

台州の漁民蘇八は万曆八年（1580）に倭寇に捕まって日本に連行された。万曆朝鮮役の直前に方白古登（関白殿）が中国を犯そうとした意図を耳にした蘇八は「家に父母妻児がおる」ことを考慮し漳州商人の貨船に便乗して帰国した。²²

『倭患考原』附『恤援朝鮮倭患考』の「附倭俗考」註釈語に、万曆十九年に琉球貢船に便乗して帰国した鄭良珍の名が見える。

右（倭俗考）鄭良珍説。良珍閩之積善里人。嘉靖末、與其弟良珩、皆被倭掠去、踰二十年所、附中山王封貢而歸。嘗面質所言、不妄也。²³

史料の欠如で万曆朝鮮役前後に日本から明朝に逃げ帰った大多数の中国人及び彼らの実態は判明しないが、秀吉の中国人説の最適な伝播者として彼らとその噂を明朝に齎した可能性が最も高く、当時の明朝の秀吉に対する認識に大きく影響したことが考えられる。

²⁰ 陳子龍等編輯『明經世文編』（中華書局、1962）卷四〇〇、許孚遠「敬和堂集・疏・請計處倭酋疏」、頁4336下。

²¹ 侯繼高『全浙兵制』（『四庫全書存目叢書』子部三一、[台北] 莊嚴文化事業、1997）第二卷「近報倭警」、頁174。

²² 侯繼高『全浙兵制』（『四庫全書存目叢書』子部三一、[台北] 莊嚴文化事業、1997）第二卷「近報倭警」、頁175～176。

²³ 黃侯卿『倭患考原』附『恤援朝鮮倭患考』「附倭俗考」（清抄本、『北京図書館古籍珍本叢刊』一〇、書目文獻出版社、1990）頁372。

五、おわりに

以上、秀吉の中国人説をめぐって考察してきた。万暦十九年（1591）に、陳申、許儀後らが齎した軍事情報に秀吉の中国人説は未だ見られなかった。琉球から帰国した閩人陳申が提供した秀吉の「唐入り」情報が、当時の官報である『万暦邸鈔』万暦十九年（1591）六月の記事に見られる。

しかし、これに対して、『国権』の万暦十九年（1591）五月条に記されている秀吉の中国人説は戦争直前に帰国したほかの中国人によって明朝に入った可能性が非常に高いと思われる。万暦二十年（1592）朝鮮役が発生した後、秀吉の中国人説も再び言及された。張瀚は秀吉の日本国王の娘婿というの特殊な身分をもって、彼の日本政権の篡奪に合理性を与え、自己の説に辻褄を合わせた。

中国国内で流行していた秀吉の中国人説は、琉球からのルートも無視できないであろう。万暦二十二年（1594）五月蕭如松の「議兵船獲倭疏」に触れられた秀吉の中国人説は、上奏文の迅速な伝達によって速やかに明朝の朝野に伝播し、さらに朝鮮に伝わったことが推測できる。

ところが、万暦二十二年（1594）三月海商許豫が自ら日本へ赴き齎した最も正しい日本情報に秀吉の中国人説はなかった。さらに翌年、福建人謝杰が著わした『虔臺倭纂』において秀吉の中国人説の誤伝を明らかにしようとしたことから、秀吉の中国人説も途絶したようである。しかし、万暦朝鮮役直後に作成された『懲毖録』及び『再造藩邦志』において、なお秀吉の中国人説を一説として保留されたことから見ても、秀吉が中国人であると言う噂の影響の大きさが窺がえる。

付記： 本稿は、平成二十年度日本学術振興会科学研究費助成金「明代万暦時期の中日関係史の研究」